

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース

No. 16

(1998年8月)

記事

1998年合同大会報告

合同大会を主催して

会計報告

電子投稿事始め、もしくはトラブルの記

河野 長

中村正人

寺沢敏夫

1998年合同大会報告

合同大会を主催して

1998年度合同大会委員長 河野 長

2年ほど前に今年の合同大会の会長をやれと言われたのには驚いた。年1回開かれるこの大会は今回が第9回であり、参加者は2000人を越えている。我々の研究者としての寿命は30年から40年ぐらいだろうから、ある研究者が一生に一度でもこの大会の会長をする羽目になる確率は、せいぜい50分の1ぐらいにすぎない。私は第1回（東京工業大学、1990年）の大会会長をやったから、免疫ができていると思っていたのである。（もっとも、大会を開くのに一番苦勞したのは本蔵さんに間違いないが）。

ともかく東大でお引き受けすることになったので、開催方針をLOCの中心の人たちと考えて以下の点を最重要視することにきめた。

- A. 大会の科学的内容を高めるために最大限努力すること。
- B. 事務的な負担を少なくするようできるだけ電子化すること。
- C. 大会開催費用については、受益者負担の原則を貫く。

Aについて言えば、この大会ではこれまでの共通セッションと固有セッションの区別を廃止し、科学的内容の全体についてプログラム委員会が責任を持つ方式にした。また、恒例となっている特別講演や懇親会も科学という点では優先度が低いと考え、LOCの負担を増やさないために今回は行わなかった。（そのかわりというわけではないが、一般向けの講演会やチャレンジセミナーを実施している）。Bについては他の報告に詳しいが、ホームページを用いた情報伝達や電子的な手法による登録とアブストラクトの投稿の採用などである。これらの方針をとった結果、大会の開き方がこれまでのやり方とかなり変わってしまうことになり、一部の学会やグループにはいろいろご迷惑をお掛けしたが、幸い全体としてはうまくいったようでほっとしている。Cにより、今回から登録料以外に論文の投稿料を徴収して財政の健全化を計った。この点に関してはもう少し説明が必要かもしれない。

さて現在では、合同大会の成功は会場がどうかでかなりの部分が決まると思われる。10会場以上を無理なく取れるようなところは大学でもなかなかない。また最近では大学といえども使用料がかなり高くなっている。今回、国立オリンピック記念青少年総合センターで14もの

会場を同時に使うことができたが、これは国立科学博物館の齋藤靖二氏のご尽力によるものである。このセンターの本来の目的は、各種青少年団体の研修などに利用することであるが、合同大会については齋藤さんの御紹介により、センター側の特別の配慮によって使用を認めて頂いていたということのようである。

今回の会場は、一般的に新築の建物で気持が良く、また各会場の間も簡単に行き来できることが好評だったようである。会場の設備も新設らしく充実していたが、最新鋭のAV機器でも解像度が低いために、普通のOHPを使いたい希望が多かったのは今後の検討課題であろう。来年以降もしばらくの間はこのセンターで合同大会を開くことに決まったようだが、そのためにはセンター側との良好な関係を保つことが必須の条件である。特に、会場の使用についてセンターから特別のご配慮をいただいていることを、一般の参加者にもっとPRすることが必要かも知れない。

さて、方針はきめてもそれをどのように実現するかはLOCの個々のメンバーにかかってくる。この点で最も大変だったのは、なんと言っても寺沢敏夫プログラム委員長であった。寺沢さんは宇宙研の吉田さんと協力して、ホームページを立ち上げ、電子投稿のシステムをゼロから作り上げた。新しいシステムは初期不良が起こるのはやむを得ないことであるが、今回の電子投稿は初めの予想より不具合が少なかったのは幸いであった。寺沢さんは、アブストラクトの投稿を受け付けてからセッションごとにコンピナーに送り、割り付けを送り返してもらって全体のプログラムを組むという作業まで、秘書やアルバイトの人たちの力を借りたとはいえ、基本的にはほぼ全部を一人でこなした。予稿集とプログラムの組版のための基礎になるデータベースもすべて寺沢さんが自分で作ったと言えば、彼のスーパーマンぶりがご理解頂けよう。

会場の設営や大会の財政などもろもろの手配は、岩上直幹事務局長と中村正人経理委員長が中心になって精力的に進めた。一般向け講演会などは栗田さんの企画である。そのほか北さん、比屋根さん、浜野さん、三浦さんなど多くの人たちが、宿舎の手配、ポスターセッション、アルバイト生のトレーニング、飲食物の手配などを、分担して準備を進められた。特筆しておきたいのは、金嶋聡さんが2月に東工大に移られたにもかかわらず、LOCの一員として活動されたことである。受付を担当された秘書の方たちや会場系の大学院生たちも含め、これらの多くの人たちに支えられてこの大会が開かれたことに感謝したい。

最後に皆様には少々耳の痛いことも含めて全体のまとめをしよう。(こういうことを言うから、人に嫌われることは承知しているが、言わなければ人は気が付かないのだからやむを得ない。)

1. 合同大会の連絡会は大会を開くための母体としては十分に機能していない。10年近くにわたって大会を開いてきた歴史的意義は大きいですが、それとていつも本蔵さんが事務局長として中心にいて、連絡会を動かしてきたことを抜きには考えられない。

2. 連絡会が機能しないと言っているのは、大会をどのように運営するかについてちゃんとした意思決定ができないからである。今回の運営方針のAやBは連絡会が議論の上で採用したのではなく、LOC側が提案して、ある程度強引に連絡会に認めさせたものである。財政的負担がなく、毎年参加も不参加も自由という会の性格からやむを得ない点もあるが、これだけ規模も大きくなり重要性を増した大会の母体としてはふさわしくない。

3. 合同大会は独立採算制である。参加学会が分担しているのはプログラム発送のためのわずかな金額にすぎない(これも全学会が全員の分を払っているわけではない)。この点が参加者に必ずしも良く理解されていないようだ。登録料や投稿料を取るのは、もっぱら受益者負担の原則の範囲で収支をつり合わせるためである。参加学会の学会費を払っているのだからと、各種のサービスを受けるのを当然のように要求される向きがあるが、これは基本的に誤った認識である。

4. 合同大会はボランティア(つまりLOC)によって運営されている。連絡会ないし参加各学会は全くタッチしない。今回受けた苦情(特に電子投稿の不具合に対して)のうちで典型的なものとして、「AGUではこうやっているのに…」というタイプのものがあるが、あちらは100人以上の常勤スタッフを抱える大組織であり、比較に意味があるとは思えない。しか

もAGUの大会の場合には、皆さんは1万円以上の登録料（とほかに同程度の投稿料）を払って参加しているのである。ついでに言えば、そのAGUですら、はじめて電子登録システムを導入したときは（投稿ではない、登録のみである、たしか1994年）、サンフランシスコの大会で苦情処理のところ長蛇の列ができたことを覚えている。

5. サービスを要求するのに熱心な一部の人を除いて、総じて皆さんは不精なようだ。今回の参加者は最終的には2500人を越えたが、事前に登録したのは800人程度であり、主催者としては、赤字が出るのではないかと大会3日目まで胃の痛む思いをした。もし事前登録のほうがはるかに多いなら、今大会の黒字額に相当する程度の値下げすら可能かも知れない。今回アブストラクトの受付で締め切り近くなるほど投稿料を高くしたのは、サーバーが過重負荷で落ちたりしないようにというのが主な理由だったが、お金の差をつけることで早めに投稿してもらおうという点で効果があったのは、登録についてもある程度の参考になろう。

6. 特に学生で当日の登録が極めて多いのにはあきれた。当日の受付は短時間で処理しなければならず、本当に学生かどうかの確認をする余裕がない。それをいいことに彼（彼女）らが安易に登録をサボっているとしたら困ったことである。学生については、将来の研究者集団の中核になってもらいたいという期待と、経済的にあまり負担をかけないようにしたい、という両方の理由から優遇しているわけだが、学会活動にまじめに取り組んでもらうという目的のためには見直した方が良くかもしれない。

7. 「科学最優先」というスローガンはともかく、現実にはプログラム委員会ないしLOCが主導的な役割を果たして作ったセッションは残念ながら、「ユニオン」セッションにあたるものは数件あったが、いずれも外部から提案されたものにそういう看板をつけただけで我々が企画したものではない。この点も今後検討すべきであろう。

以上の反省をふまえて、次の2点を（第2項は特に来年のLOCを引き受けられた北海道大学に）提案して結論としたい。（1）合同大会の現在の規模と重要性、また最近の合同誌の発刊などを考慮し、これらの共同事業の母体にふさわしい組織を作ること、（2）事前の登録料と会場での登録料との間に今までより大きな差をつけること。特に学生については、事前登録のない場合は一般として受け付けること（もちろん、やむを得ない事情のある場合も考慮して、無断欠勤のあと医者診断書を出すのに相当する程度の面倒な書類を提出した場合のみ、当日も学生身分で受け付けるぐらいは必要だろう）。

会計報告

1998年度合同大会経理委員長 中村正人

1998合同学会は事務の電子化等の初期投資のため、参加費の値上げを参加者に強いることとなった。予稿集を参加費の一部とする事で、従来予稿集を購入されなかった方には大幅な値上げとなったことをお詫びしたい。しかしながら、収入の見通しを立てるためには必要な処置であった。また、今回から受益者負担の原則に基づき投稿料を徴収することになった。これらの難しい問題をやらんでいたにも関わらず、参加各位の協力と暖かな励ましを得られたことに経理委員長として深く感謝の意を表す。

収入と支出を以下に示す。収入の項のうち投稿料はほぼプログラムおよび予稿集の印刷費用と釣り合っている。参加費はその他の支出（会場費、ポスターセッション準備、電子化システム、アルバイト、雑費など）に当てられた。雑費には実行委員の旅費、泊まり込み費用、事務引継経費、ポスターセッション時に提供した飲食物、及びコーヒーショップでのコーヒー代への補助が含まれている。昼食の食事券は買い取りであり、この券を完全に売りさばけなかったため、項目単体では赤字を出した。この赤字分は参加費から補填している。全体的には312万円（収入の15%）を連絡会にプールすることが出来た。これは当初の参加者見込み2000名を大幅に上回り2475名の参加があったためである。

収入

項目	一件当たり	件数	金額
投稿料		1,629	¥3,244,500
参加費（一般事前，含予稿集）	¥5,000	720	¥3,600,000
参加費（一般当日，含予稿集）	¥6,500	923	¥5,999,500
参加費（学生）	¥2,000	832	¥1,664,000
予稿集別売 （学生 502，会員 208，一般 47）		757	¥1,816,000
オリンピック宿舍			¥1,426,690
予稿集広告費			¥100,000
企業展示			¥160,000
食事券売り上げ	¥640	2,647	¥1,694,080
弁当代			¥418,000
銀行利息			¥143
計			¥20,122,913

支出

項目	金額
会場費	¥2,613,200
オリンピック宿舍	¥1,426,690
プログラム印刷	¥2,158,958
予稿集印刷	¥1,758,750
アルバイト	¥1,769,060
ポスターセッション準備	¥961,800
旅費	¥346,000
投稿システム等ソフトウェア	¥700,000
事務用品	¥600,383
計算機システム	¥781,778
通信費	¥339,107
雑費	¥930,790
弁当代	¥418,000
食事券	¥2,094,404
クレジット手数料	¥104,043
連絡会への引継	¥3,119,950
計	¥20,122,913

電子投稿事始め、もしくはトラブルの記

1998年度合同大会プログラム委員長 寺沢敏夫

「悪夢のような数カ月が過ぎた」，というのが5月末に合同大会が終わった頃の実感でした。いただいた苦情メールでの評判の悪さから，電子化は1年でお終いか？とも思っていたのですが，北大の方々の方断により，1999年度も電子投稿の方針は継承されるとのこと。投稿に苦勞された方々へのお詫びも込めて，トラブルの記録を残しておくのも意味があるかと思います。

なお、電子化したための副産物として、プログラム編成作業に関与した LOC メンバーの人数は例年より少なく済みました。これは、そのように意図したというより、データが 1 箇所に集中していたため「分担しようにも分担しようがなかった」のが真相ですが、その分、協力いただいた吉田さん、秘書・院生ほか数人の方々には相当密度の濃い作業を担っていただきました。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

(1)電子投稿に踏み切るまで

東大が 1998 年度の大会を引き受けるにあたってまず問題となったのは、折り悪しく建物引越しの時期とぶつかり従来のような郵送のみによる予稿収集方式では混乱が避けられないことでした。集めた予稿(段ボール十数箱以上?)を安全に保管・移動できる保証がなかったからです。締切時期をうまく設定して逃げられないか、との議論もあったのですが、引越し時期そのものが学内事情でなかなか決まらず、その解はとれませんでした。(実際、引越しは予稿締め切り当日の 2 月 27 日となってしまう、もし旧来の方式でやっていたら大変なことになった、と思われれます。)旧来に変わる方式として電子投稿の検討を始めたのは昨年(1997)の春からですが当時考えたこととして、(a)予稿原稿にもろもろの補助データを足しても一件十数 kB 程度であろう。従って、2000 件程度の全投稿でもデータ量は高々 20~30MB である。その位であれば日常的に扱っている人工衛星データの 1 日分以下であり、処理には問題なからう。(b)幸い、WEB による情報公開が一般的となっており、これを利用すれば容易に電子投稿が実現するのではないかと結果として(a)は事実でした。ただし、集まったデータの形式が揃っていれば、との条件が付きまします。(b)も、結果としてみれば 1600 件弱が電子投稿されましたので WEB 普及率については予想を上回るものでしたが、残念ながら「容易に」投稿できたとはとても言えませんでした。それは以下のような事情です。

(2)電子投稿時のトラブル

データの形式を揃えるため、WEB ソフトの作成を担当された吉田さんをお願いして、さまざまな警告メッセージを埋め込みました。この警告が必要以上に出ってしまったようです。誤って出ってしまった警告には、1 月の投稿開始当初は単純なソフトのバグ(メモリ割り当て不足など)によるものもありましたが、投稿件数に比例して原因不明の警告・トラブル発生件数が増えて行きました。真の原因はいまだに不明ですが、どうやら、日本語入力部分の文字化けに関連するようです。PC やマックの同じような環境から同じソフト(Netscape など)を使って投稿しても、1~2%程度の確率で一部の文字が化けてしまうらしいのです。文字化けが起きると、それを検出した WEB ソフトは警告を返し続け投稿をストップさせてしまいますし、ひどい場合には投稿者のシステムが落ちてしまいました。未検証の仮説は「投稿者が使っているシステム(PC、マックを問わず)には 1~2%の確率で潜在的な不安定性を抱えているものがある。普段、この不安定性は表に出ないのだが、今回の電子投稿のような重い作業をさせると、時にこの不安定性が顕在化し、文字化けなどのさまざまなトラブルを引き起こす」というものです。作業がかなり重いことは、「マックでの投稿時、メモリ 16MB のシステムでは殆ど途中で落ちるが、メモリを増やすと大丈夫である」との報告があったことでも明らかでした。これまでに経験しないトラブルに遭遇された方は、当然、ご自分のシステムではなく、LOC 側のシステムが悪いと考えられるでしょうから、「怒り心頭に発し」たのも無理のないことでした。苦勞された方から、「テストを十分にしていないシステムで大事な合同学会の投稿作業を実行したのは怪しからん」というもっともなご批判をいただきましたが、テストはできる範囲では行ったのです。しかし、ボランティアによるテスト件数は高々数十件なので、トラブルの発生期待件数は 1, 2 件に過ぎません。後で思うと怪しいトラブルもあったのですが、そのときは重大視しませんでした。苦情の中に、「確認ボタンを押しても入力データは保存されるはずなのに、戻ったら消えていた!」というものが何件かありましたが、これも上記の文字化け・システム不安定絡みのトラブルだと疑っています。実は、ボランティアによるテスト期間中、これと同様の報告が 1 件ありましたが、そのケースでは「他の場合でも Netscape の調子が悪いので、それを再インストールしたら直った」、とのことで、一般化しては考えませんでした。いずれにせよ、殆どのト

ラブルは日本語入力に絡んで起きたようです。AGU や国際学会のように英文入力だけで済ませられればトラブル件数は激減したでしょう。

また、WEB 画面のレイアウトが悪かったため、見にくい位置にあった最終送信ボタンの存在に気づかず、データが送られなかったケースが LOC の知る限り 3 件ありました。それらは、自分の予稿が一向にリストアップされないことに気づいた投稿者からの連絡により、救済することができましたが、連絡いただかないまま、講演をキャンセルしてしまったケースが埋もれているのでは? と恐れます。もし該当の方がおられましたら深くお詫び申し上げます。

なお、当初は回線混雑によるシステムダウン・回線ダウンを警戒していましたが、そうしたトラブルは幸い生じなかったようです。締め切り当日の 2 月 27 日には 400 件程度の投稿がありました。2 系統のシステムを用意しましたので 1 システムあたり 200 件程度、ある瞬間の同時アクセス件数はたかだか数件程度となって何とかなったようです。(しかし、投稿密度がこの倍に達したら危なかったかも知れません。)

(3) 投稿受付後のデータ修正作業

こうして、とにかく 2 月 27 日までに 1600 件少々の投稿は集まりました。エラー発生・投稿不能報告を受けて、緊急に電子メール投稿に切り換えて何とか切り抜けたものが十数件ありましたが、それを加えた 1629 件が最終投稿件数です。それ以後は数日で全データの処理が終わるだろうと踏んでいたのですが、そうは問屋が卸しませんでした。見込み違いは著者名表記の曖昧さでした。全著者索引を作るためには延べ 5600 名ほどの全著者の同定を行う必要があります。昨年までは、講演申し込み用紙から読み取ったデータ(漢字表記、読み、所属機関)に基づいて製版業者に同定を行ってもらいましたが、今年はそれを LOC で行わなければなりません。しかし、これが一筋縄ではいかないのです。例えば、同じ「さいとう」さんでも共著者の表記は「齋藤」「齋藤」「齊藤」の 3 つにばらついており、果たして同一人物なのか、他人なのかアルバイトを 2 人お願いして人力による全件チェックをかけるしか方法がなく、それだけで数日かかってしまいました。なお、「著者についての WEB のデータ入力は大変面倒である」との苦情も何件かいただいております。共著者数が多い場合、もっともだとは思いますが、あの程度詳しくデータを集めても人物同定には苦労させられました。

さて、WEB で入力した画面の 1 行と印刷時の 1 行は違ってきます。このため、表現上強制改行が必要な場所には「@@」を入れることをお願いしたのですが、このお願いの趣旨が徹底せず、すべての行の最後に「@@」を入れた方が投稿期間中、毎日数人はおられました。そのまま処理にかけると、印刷の出来上がりが細切れとなって見にくいので、余分な「@@」は人力で取らざるを得ませんでした。こうした改行指定などの方法には改善の余地が大いにあると思います。また、表現上、表形式が必要な予稿もありましたが、そのための手段を提供していなかったため、カラムがズレてしまい見にくいケースが数件あり、人力により、整形せざるを得ませんでした。

また、ご存じのように予稿集には所属機関名を和文・英文の両方で載せたのですが、トラブル発生の腹立ち紛れ? に(失礼!)、「東西大学理学部」、「地球科学研究所」(どちらも仮称)の英文表記を「Tozai daigaku Rigakubu」や「Chikyukagaku Kenkyusho」と入力したようなケースがあり、そのまま印刷するとみっともないので、やはりアルバイトを頼んで極力取り除きました(が、取りきれず予稿集に残ってしまったものもあり、申し訳ないことでした。)

(4) 郵送投稿・図の投稿

LOC での作業手順の簡素化のためには、できるだけ投稿データの入力システムを一本化することが不可欠です。しかし、どうしても郵送投稿と電子投稿の 2 本立てにせざるを得ず、これらをどう共存させるか、頭の痛い問題でした。結局、ご協力いただいたように郵送投稿の締め切りを 1 カ月早く設定することで作業を分けたのですが、これはうまくいったようです。郵送分を当初は 300~400 件と見込んでいたものが、実際には 30 件と少なかったこともあり、LOC 周辺の院生諸君にアルバイトをお願いするだけで処理を済ませることができました。(郵送された予稿データを WEB から打ち込んで貰って電子投稿と同じ形式に揃え、以後の処理を一本化し

ました。) 郵送投稿と電子投稿の比率は締め切り日の差、手数料の差などに微妙に依存して決まるものですが、これだけ電子化率が高ければ、郵送分の処理自体はそれほど大きな問題にはならないと思われまます。

図のオプション化について、当初、連絡会で提案した時は、相当の批判を浴びたものです。しかし、電子的に図を集めるうまい手法がないことから、図はオプションとし別に郵送する方式を認めていただいたのはご存じの通りです。結局、図付きの予稿は郵送投稿の内 9 件、電子投稿の内 27 件の合計 36 件に留まりました。これも当初予想の 200~300 件を大幅に下回るもので、おかげで懸案の予稿集の軽量化も同時に実現できてしまいました。

(5) コンピュータとの情報交換作業

電子化で一番問題が少なかったのはコンピュータとの連絡作業でした。「一切郵便を排す」方針で臨みましたので、投稿された予稿は 1 日毎の処理後直ちに WEB にデータを掲示し、コンピュータ自らそこを閲覧していただくことで郵送に替えました。これですと 1 日分の投稿データ処理→WEB 掲示処理が済み次第、時間遅れなしにコンピュータに投稿内容を見ていただくことができます。コンピュータへの情報提供はこのように締め切り前から行っており、投稿が出遅れていたセッションではコンピュータから催促いただいた場合もあったようです。コンピュータのセッション編成作業には口頭・ポスターの区分け、口頭発表の順番決めなどが必要ですが、各コンピュータには、WEB 画面のハードコピー作成→古典的な紙のソート作業、という形で作業いただきました。1 件毎の内容をこのように WEB 経由で送るとともに、投稿締め切り後にはセッション毎の投稿タイトル・著者名リストを一覧表の形でコンピュータに送り、発表形態ごとに区分し、順番に並べ替えた後、LOC に返送いただきました。返送手段には ftp を用いたのですが、全 58 件中、数件、この段階で文字化け(またしても!)が発生したのは予期せざる事でした。(事前のファイル転送テストが必要であったと反省しました。) 幸い件数が限られていましたので、大事には至らずこの段階の処理を終えました。

(6) WEB 投稿 vs. 電子メール投稿

「WEB 投稿よりはもっと単純な電子メール投稿を考えるべきだ」とのご意見を幾つかいただきました。なぜ電子メールにしなかったか、以前の FAQ(WEB 上の質疑応答集)にも書いておいたのですが、十分ご理解いただけていないようなので、その理由を多少補足して述べておきます。

まず、メール投稿には失敗の実例があります。某研究所の主催した 200 人程度の国際ワークショップで電子メールによる予稿投稿を受け付けたところ、そのデータから予稿集を作り上げるのに担当者が 3 日程つぶしました。手間がかかった一番の原因は、タイトル、著者名、予稿本文などの切りわけにあったそうです。単純に比例計算しますと、合同大会の電子メール受け付けの後処理は 1 カ月を要することになります。処理時間を短縮するためには、これらの項目が自動判定できるようにすればよいのですが、どうやらそれはうまくいきません。昨年春頃、ボランティア 20 名程にお願いして、タイトル、著者名、予稿本文にそれぞれ開始タグ(自動判定可能な @title, @author, @abstract といったユニークな文字列)の埋め込みをお願いして投稿演習をしていただいたことがあります。結果は、こちらの期待通りの予稿を送っていただけたのは 2 名のみ、残りは 18 人 18 様となって人手を介さずには処理不可能でした。(タグのスペルミス、位置ミス、半角・全角の違い、等々)。人手が介在すると時間が余分にかかるのは勿論です。今回も、WEB からの投稿に失敗した場合には緊急電子メール投稿に切り換えていただきましたが、その処理は人手で行い平均数分かかりました(自動化は初めから諦めていました)。1600 件の投稿をもし全部、電子メールにしたとすると、上の経験から自動処理可能なのは 10% 程度であり、他は全て人手により一件最低数分かかったでしょうから、それだけで延べ百数十時間を要したと思われまます。これは LOC の能力を完全に越えています。

WEB による電子投稿では(2)に述べたような問題はあったものの、受け付け後の各項目切り分けは 1 件あたり数秒以下で自動処理することができましたので、全数処理でも数十分で済みまました。(なお、(3)のデータ修正の問題は受け付けの方式には関係なく発生し、いずれにせよ

人力処理しなければならなかったものと思われまます。)

(7)おわりに

上に述べたように、「何とかなるだろう」と思って向こう見ずに始めてしまったためにさまざまな迷惑をおかけしてしまいました。しかし、ボランティアで行う限り技術力・準備期間は十分なものを用意することはできないでしょう。今回 1998 年度の電子投稿方式の原案を提出し、「やってもよろしい」とのお墨付きをいただいたのは昨年 9 月の連絡会であり、その後、ようやく本格的な準備作業にとりかかりました。(いうまでもなく、「お墨付き」をいただかないことには予算は一円もありません。) 11 月下旬(連絡会ニュース原稿締め切り)が方式確定のタイムリミットでしたので、それまでには 2 カ月少々しかありませんでした。協力をお願いした吉田さんはデータベースの専門家ですが、このような大規模な WEB の運用は初めての体験であり、さまざまな試行錯誤が必要でした。それには 2 カ月の開発期間は決して十分とは言えず、十分なトラブル退治ができなかったのが悔やまれます。いただいたご批判のなかに「国際化の時代に日本語だけしか受け付けられないのは怪しからん!」というものも何通かありましたが、これは重々承知していたことです。LOC でも、何とか英語版が用意できないか? と議論したこともありましたが、上に述べたような事情で、とてもそうする余裕はありませんでした。日本語を母国語とされない投稿者の方々にはお詫び申し上げます。

今回経験したさまざまな失敗を通じ、どうやら電子投稿の運用方法は見えてきたと思います。が、数式や図の取り扱いなど、未解決の問題は数多くあると思います。今後、電子投稿方式を続けるとすれば、なんらかの形で専門家集団の介在が必須であろうと考えられます。

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース 第 16 号

1998 年 8 月 12 日発行

発行： 地球惑星科学関連学会連絡会
 幹事 坪井誠司 (日本地震学会)
 編集： 地球惑星科学関連学会連絡会
 委員 加藤尚之 (日本地震学会)